



Vol.23

# ゆうことみゆきのふくふくトーク ソノコ de ソノコ

アイヌ文化にどっぷり浸って生きてきた  
本田優子(札幌大学副学長)と  
村木美幸(アイヌ民族博物館専務理事)が、  
その魅力をソノコ(=お便り)形式で  
語り合います。

イラスト/安田千夏

## チセ(家)



チセと呼ばれるアイヌの伝統的家  
屋が北海道各地で復元されているよ  
ね。多くはヨシを使った茅葺き<sup>かや</sup>だけど、旭川  
などでは笹葺き。その地方に多く生えてい  
る材料を利用したみたいです。基本的には、  
間仕切りのないワンルーム形式で、家の中央  
にある囲炉裏が生活の中心。人間にとって一  
番身近で大切なアペフチカムイ(火の神)の  
寝床なので、いつもきれいにしておかないと  
いけないんですって。

茅葺きの家って、さぞかし寒いだろうって  
言われるけど、それは現代住宅と比較して  
の話。チセの材料となるヨシの茎は中空部  
分に空気が詰まっているので、厚くどっしり  
した壁を造れば、板なんかよりはるかに暖か



く、北海道に適した住宅だったみたい。明治  
初期に役所が建てた本州式の家に住むこと  
を強いられたアイヌの人たちが、あまりの寒  
さに逃げ出してしまったというエピソードを  
聞いたことがあります。

ただ、たとえ弱火でも火を焚き続けてさ  
えいれば蓄熱効果で暖かいけれど、いったん  
火が消えてしまおうと冬はとんでもない寒さ  
になるんですって。で、焦って大きな火を焚  
けば焚くだけ激しい上昇気流が起こり、その  
分壁ぎわの冷たい空気が囲炉裏の方に吹き  
寄せて来るという負のスパイラル。だから、囲  
炉裏の火を絶やさないように上手に灰をか  
ぶせて眠り、翌朝灰をどかすとまたポツと火  
がつくようにするのが、その家の主婦の務め  
だったとのこと…なんだか魔  
法みたい。

白老の博物館には何軒も  
のチセが並んで建ってて、壮  
観だよな。



チセの母屋と玄関  
兼物置代わりのモセ

Mの屋根の高さが違って  
るので、五棟のチセが十棟にも  
連なって見えるの。この家並  
みは当博物館のビューポイン  
トのひとつですよ。この時期

チセ  
(アイヌの伝統的家屋)



は、薄らと雪化粧をした段葺きの屋根から  
立ち上る煙と、軒下に吊下げられた寒干の  
鮭が何ともいえない風情を醸し出している  
ので一見あれ。

当館のチセはどれも職員が建てたもの。  
伝統的な家造りの技術や自然素材の利用、  
建築に伴う儀礼などの継承活動が目的。か  
つては、建築の専門業者がいたわけではない  
ので誰もが持つ技術としてチセ造りがあっ  
たんだよね。チセを建てる時には、近くにき  
れない水があるか、川の氾濫や土砂崩れが  
ないかなど利便性や防災性を考えた条件の  
良い場所が選ばれたんだって。どの時代でも  
安心して住めるというのが一番だよな。

チセの多くは長方形で、その向きは神々  
が入り出す窓、カムイプヤラを設  
ける方向で決められたというよね。  
白老だとカムイプヤラを東側に造る  
ので家の長軸は東西に向くんだけ  
ど、地域によっては川の上流や高い  
山の方など、そのコタン(村)で大切  
だと考えられる方にこの窓が造られ  
たんだって。

私がチセで一番好きな所は囲炉裏  
端。薪が燃えるのを見るだけでま  
ったりとして落着くの。特に寒い冬  
は、火の神の温もりと癒しのパワ  
ーを感じる囲炉裏端はお薦めだよ。①

■本田優子(ほんだゆうこ):金沢市生まれ。札幌大学副学長。北大卒業後11年間平取町二風谷に住み、アイヌ語講師を務める。  
■村木美幸(むらきみゆき):白老町生まれ。アイヌ民族博物館専務理事。先住民族アイヌの一員として文化継承活動に努める。  
■安田千夏(やすだちか):神戸市生まれ。元アイヌ民族博物館学芸員。現在は同館でアイヌ若手育成事業の自然講座講師を務める。